

## 琵琶湖疏水の出発点「大津運河」の紹介

### 1) 琵琶湖疏水の散歩道の紹介

琵琶湖は、面積674平方キロメートルの日本一の湖で275億トンの貯水量があり、近接した3ヶ所の取水口から毎日200万トンの水が疏水を通して京都に送られている。

琵琶湖の水位の1センチメートルが670万トンの水に相当するから、湖の巨大さがわかる。琵琶湖の南端から京都の中心までわずか10キロメートルしかないが、その間には岩質の悪い山が存在し、当時の技術では難しいと考えられた最長の水路トンネルの掘削が必要であり、この困難を克服した成功物語は小説や映画でも紹介されているが、産業遺産として、また現在も京都市の水道水の供給路として稼動しつづけている。

この琵琶湖疏水を、流れに沿って大津運河・山科疏水・蹴上インクライン・鴨東運河・鴨川運河・疏水分線と区分して順次紹介していくが、今回は出発点の大津運河の特徴と楽しみ方について解説したい。

### 2) 大津運河の概要

琵琶湖疏水の取水口は琵琶湖の南端にある三保ヶ崎という入江に存在し、近接した場所に3ヶ所の取水口がある。

第1疏水取水口	明治23年(1890)完工	地上ルート(トンネルと水路)
第2疏水取水口	明治45年(1912)完工	地下ルート(全部トンネル)
第2疏水連絡トンネル	平成11年(1999)完工	地下ルート(全部トンネル)

第2疏水は需要量の増加、連絡トンネルは琵琶湖水位の異常低下対策のために建設されたもので、散歩道として楽しめるのは第1疏水ルートのみである。

疏水の出発点となる三保ヶ崎は、JR大津駅から歩いて20～30分、京阪・浜大津駅から10分くらいの交通至便な位置にある。

三保ヶ崎から直線で西に進み、第1トンネル東口までの約550メートルが大津運河である。この間に5本の橋が架かっており、水路は建設当初の姿をそのまま残している。



ヨット停泊中の三保ヶ崎



第1疏水の取水口

大津運河は桜の名所としても有名で、両側に植えられた桜の老木が桜花のトンネルを形成し、第1トンネルが貫通している長等山の三井寺観音堂の桜と合わせて千本桜と呼称されている。また国宝の建物が並ぶ広大な敷地を持った三井寺がすぐ横にあり、紅葉の季節の散策には適したゾーンを形成している。



桜のトンネルで賑わう大津運河



晩秋の季節を静かに流れる

### 3) 散策のお薦めコース

琵琶湖疏水を数回に区分して実施する場合、大津運河を出発点としてほしい。三保ヶ崎から大津運河の直線コースを歩いて、第1トンネル東口まで、途中にある水位測定標・第2疏水の取水口・大津閘門などの見学を1時間くらいで済ませ、突き当たりを左手に進み、第1トンネルの上を越える「小関越え」を30分くらいかけて歩くと、途中に建設工事で主役を演じた「第1堅坑」があり、2436メートルあるトンネルの長さを実感しながら次の区分の「山科疏水」に到達することができる。小関越えは小学生の日帰りコースになっているが、高齢者には少し厳しいかも知れない。大津の西側の山手には多くの寺社仏閣があり、琵琶湖博物館・琵琶湖ホール・琵琶湖遊覧船など観光施設が揃っているので、大津で一泊して朝の京阪電車・追分で下車し、10分くらい歩けば第1トンネルの出口（山科疏水の出発点）に達する。

詳細については、下記ホームページの「散歩道・大津運河」の項を参照してほしい。

関連ホームページ [http://www.geocities.jp/biwako\\_sosui/](http://www.geocities.jp/biwako_sosui/)

いしづえ

琵琶湖疏水の観光開発を推進する 近代京都の礎を観る会  
会長 高桑暉英